

平成29年2月3日

鹿児島大学大学院人文社会科学研究科長 殿

学位(博士)論文審査の概要及び結果報告書

地域政策科学専攻 韓 艶麗

学位論文題目

内モンゴル農耕地域における「伝統文化」の形成と変容
—通遼市における婚姻習俗を事例として

(Formation and transformation of a “traditional culture” in Inner Mongolian agricultural region : a case study of marriage customs in Tongliao)

論文審査の概要

1. 本論文の目的

本論文は、内モンゴルの一般常識としては「伝統文化」を保持しておらず、往々にして「漢化」されたとみなされがちな東部の農耕地域に居住するモンゴル族の文化について、通遼市における婚姻習俗の形成と変容の事例を主たる題材として、伝統文化という観点から検討することを目的としている。

歴史的検証から、彼らの婚姻習俗は現地の農耕集落化が完了した20世紀前半から1990年代に至るまで、大きな変化は経なかったと考えられる。しかし一方で、そうした習俗の反復を伝統文化であると主張する者は少ない。一方2000年以降、様々なモンゴル文化イメージのハイブリッドで構成された「伝統的」披露宴のスタイルが都市部の知識人を中心に隆盛し、東部農耕地域出身者がこぞってそれを採用するという現象が発生している。實際上、そこで披露されている「伝統的」文化要素は書籍など各種メディアによって権威づけられている一方、必ずしも過去に実践されていたわけではないという意味で伝統的とは呼び難い。

にもかかわらず、人々はなぜそこに伝統文化を見出すのかという問題意識を筆者は持っており、それを明らかにするため、現在の婚姻儀礼の中心的イベントである披露宴をプロデュースしている司会業者たちの語りと実践について実証的研究を行った。

終章は「総括と今後の展望」と題し、第5章までの議論の要約を行うとともに、今後の展望として、伝統文化Bの研究と発信の重要性を指摘する。またそれが東部内モンゴル人のエスニック・マーカーとしてアイデンティティの維持に効果的であると述べる。

3. 本論文の評価

1) 評価されるべき点

本論文は伝統文化Aと伝統文化Bを分けて論じることで、本質主義的議論と構築主義的議論に2分されがちな伝統文化に関する議論を相対化することにある程度成功している点に最大の評価点がある。また、SNSなどの新しいメディアをインタビューや観察に活用することで、調査地との距離や投入できる時間の短さをカバーしている点も評価できる。

2) 問題点

東部内モンゴル人のアイデンティティ形成には西部内モンゴル人のみならず、周辺に居住する漢族との関係が大きく影響しているはずであるが、本論では言及が極めて少ない点に問題点がある。また本論文では伝統文化Bを地元の住民が「無自覚」として評しているが、実際には伝統文化として自覚していないだけであると思われる点、モンゴル語文献の表記が不統一である点も問題として挙げられる。

4. 総合評価

以上のように、本論文にはいくつかの問題点が見られるものの、現在変容しつつある農耕モンゴル人の婚姻儀礼に関する民族誌として豊富な情報量を伴い、また伝統文化に関する議論も一定の水準に達していると判断される。そのため、本論文を博士(学術)を授与するに値するものであると評価する。

授与する博士学位 学術

論文審査結果 合 否

審査委員

主査 尾崎 存宏

副査 桑原 季枝

副査 大田 由紀夫

副査 ミンシルト